

福祉 × 農業 × 転換

トマト栽培からの転換、ポットファームシステムを活用してメロン栽培で収益アップ



≡(★注目ポイント★)≡

- 1 栽培システムを先駆的に導入している事業所への視察や研修と、地元スーパーマーケット等との販売提携で安定栽培・安定収入
- 2 作業道具の活用で作業の単純化及び効率化を図り、新たな作業も利用者はスムーズに順応
- 3 栽培技術を高めて、冬と春の2期収穫の栽培品種から年3～4回収穫できる栽培品種への移行で、生産・収益アップ

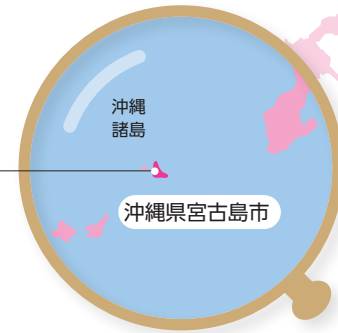
社会福祉法人みやこ福祉会 みやこ学園
メロンランドみやこ
<http://www.miyakofukushikai.jp/>
 (沖縄県宮古島市)

株式会社サンエー※

●基本データ(令和3(2021)年12月現在)

〒906-0013
 所在地 沖縄県宮古島市平良字下里 3107番地の243
 TEL 0980-73-7770
 開設年 平成13(2001)年
 実施事業 就労継続支援B型 (定員34人、現員45人)
 主たる障がい 特になし

利用者の平均年齢 42歳
 福祉事業活動における 直接支援職員数 10人
 目標工賃達成 指導員の配置 有



※ 株式会社サンエー／地元沖縄のスーパーマーケット

概要

みやこ福祉会では、就労継続支援A型の事業所の方々と同じように頑張っている就労継続支援B型事業所の利用者の工賃を思うように上げられないという課題がありました。そこで平成26(2014)年度から「独立ポット耕養液栽培システム」(ポットファームシステム)を活用した『トマトランドみやこ』を開設し、工賃の向上を目指すことにしました。

令和2(2020)年度以降は、さらに収益率の高いメロンに栽培作物を変更し、事業所はトマトランドみやこから『メロンランドみやこ』に変更して事業を継続中です。

利用者数と活動日数 (令和3年9月実績)

1日以上参加した利用者数 5人
 活動日数 20日
 参加した延べ人数 73人

利用者の所属 | 就労継続支援B型事業

開始までの経緯

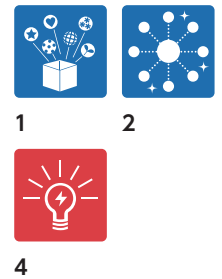
みやこ福祉会では、就労継続支援A型の事業所の方々と同じように頑張っている就労継続支援B型事業所の利用者の工賃を思うように上げられないという課題がありました。そこで平成26年度から「独立ポット耕養液栽培システム」(以下、ポットファームシステム)という栽培システムを活用したトマトランドみやこを開設し、工賃の向上を目指すことにしました。

ポットファームシステムを活用してトマトを栽培するトマトランドみやこは、平成26年に開設しました。その後、収益率の高い作物を追求し、メロン栽培にたどり着きます。



トマトランドみやこ(現・メロンランドみやこ)外観

SELP Vision 2030



具体的な取り組み

トマトランドみやこはポットファームシステムという栽培システムを活用し、トマトの栽培・販売を開始しました。利用者は主に収穫作業の補助や、職員が作物の生育状況を確認しながら、葉を落とす葉かき作業で、出た葉を片づける作業等を行っています。

令和2年度以降は、さらに収益率の高いメロンに栽培作物を変更し、事業所はトマトランドみやこからメロンランドみやこに変更して事業を継続しています。

職員の役割

本事業に携わる
職員の人数

2人

職業指導員

作業指示および作業進捗管理

職業指導員

環境（日々の気候）を踏まえながら作物の生育状況を把握し、ポットファームシステムを活用して生産を行います。利用者には、作業に取り組むことを促し、加えて、作業の具体的な指示や作業進捗の管理なども行います。



ポットファームシステムを用いたメロン栽培



作業の様子

生産設備・備品等

ポットファームシステムを導入しています。生産設備・備品等の導入や更新に対する助成金は受けませんでした。

ポットファームシステムの特徴

- ・高密度での長期栽培を可能にし、高収穫量、安定生産性を実現できます
- ・少量、多頻度灌水により生育ステージに適したきめ細かな溶液管理が可能です
- ・土壌から隔離されており、土壌病害虫の侵入防止、病害拡大の抑制が可能です
- ・灌水時の排水量を減らすことができ、コスト削減と環境に優しいシステムです
- ・狭い場所で育てることで水分や肥料を無駄なく取り込むことができ、着果がよくなる、作物の糖度が増すといった効果があるといわれています

工夫していること、心がけていること

生産の ノウハウの 取得

農作物の生産ノウハウを得るため、ポットファームシステムを先駆的に導入していた事業所を視察し、研修が行われました。

販路の 拡大

同法人のA型事業所が、すでに野菜の販売を行っていたため、その取引先を中心に営業活動を行う、地元創業のスーパーと販売提携を結ぶなどの方法で販路を確保しました。

メロンへの 生産作物の 変更

栽培方法とポットファームシステムの利点（水はけ・点滴栽培等）が合致しており、安定的に栽培できる見込みがあり、理事長が栽培に関するノウハウを持っていたメロンに作物を変更しました。トマトは定植してからその苗を10か月育成させ実を収穫するのに対し、メロンは1つの苗に実を1個着果させるため約3～4か月で収穫し、その後新しい苗を植えるという循環で1年間に数回転生産工程が組まれます。定植作業などの回数は増えますが収穫作業が大幅に少なくなり、利用者、職員の身体的負担が減少します。

また、観光産業の成長により宮古島産のフルーツに注目が集まっている、作物の単価が高い、生産農家が少ないといった点もメロン栽培を後押しする要因となりました。

課題と対応

課題 ポットファームシステムの技術習得 **対応** ポットファームシステムの会社に指導を受け、システムを導入済みの事業所に視察に行き研修を受けて知識を得、技術とノウハウを習得しました。技術の習得は事業転換に不可欠でした。

課題 利用者の作業への順応 **対応** 作業補助（葉かき作業、収穫物の搬送および磨き、誘引作業*補助）など、抵抗なく入れる作業を中心にを行いながら、徐々に専門性の高い作業に移行しました。また、利用者の身体的負担を減らすよう作業道具を工夫しました。



作業道具の工夫（高所作業車）

- （例）
- ポットファームシステムの間にレールを敷いて座りながら作業ができる台車を用意する
 - 高所での作業用に梯子のついた台車を用意する など

* 植物の茎や枝、つるを支柱に結びつけて固定する園芸作業

反応・効果

利用者の反応・効果

利用者は、自らが生産した商品が店頭に並び、購入されていると実感できたことで、新しい作物をつくる不安感が払拭され意欲の向上につながりました。

地域の反応・効果

地域には障がい者の活躍の大きな広報となりました。また、地域の学校やJICA（ジャイカ：国際協力機構）の方々が新しい農業のスタイルとして視察に訪れる等、障がい者の活躍の場としてだけでなく、この取り組みが地域の社会資源となりました。

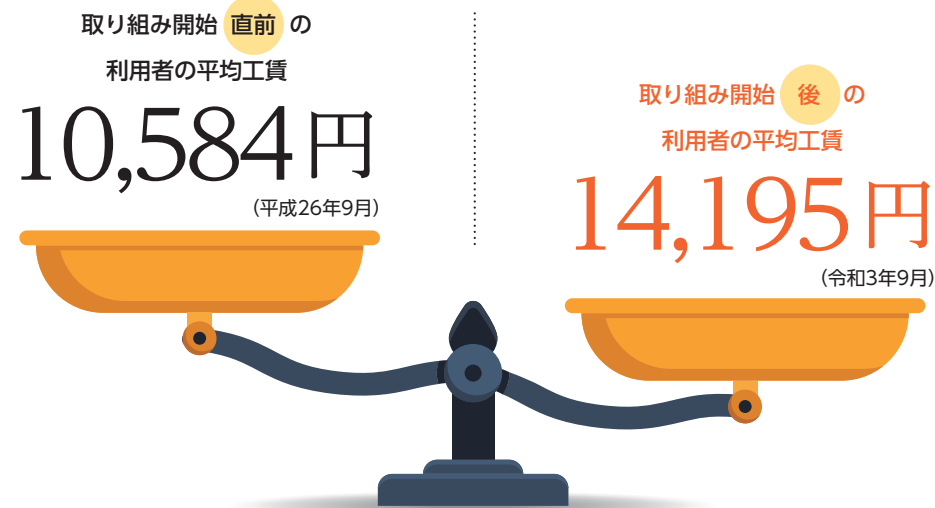
★ 展望・課題

現在の栽培環境にあった品種を選定し、安定した生産販売を可能とすることと、商品としての価値がより高いメロンを育てられるような事業展開を目指しています。



工賃の変動

官公庁の業務委託が中心であるため、受注高に応じて大きく収入が推移します。メロン栽培・収穫から販売事業は受託ではなく独自事業であり、安定した売り上げと収入を得て、工賃引き上げの財源となっています。



みやこ学園のSDGsへの取り組み

ポットファームシステムは、メロンを定植するポットの上に小さな穴の空いたチューブが通っており、その穴から点滴方式で栄養分が入った溶液を供給します。その際、ポット内で消費されなかった溶液はポット下のとくに落ちそれが廃液タンクへと集まります。みやこ福祉会ではその溶液を園芸班で育成している花木やプランターで再利用します。栄養分も十分であり生育に非常に有効です。

